

★ 5分前着席を心がけましょう

司式 熊田雄二牧師

前 奏
開 会 招 詞

* 賛 美 歌 16：1 久しく待ちにし

久しく待ちにし主よ とく来たりて 御民の縄目を解き放ちたまえ
主よ 主よ 御民を救わせたまえや アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 (詩編 51 編)

かみ 神よ、わたしを^{あわ}憐れんでください。御^{おん}慈^{いつく}しみをもって。深^{ふか}い御^{おん}憐^{あわ}れみをもって、背^{そむ}きの罪^{つみ}をぬぐい去^さってください。わたし^{とが}の咎^{とが}をことごとく洗^{あら}い、罪^{つみ}から清^{きよ}めてください。わたしは^{とが}咎^{とが}のうちに産^うみ落^おとされ、母^{はは}がわたしを身^みごもったときも、わたしは^{つみ}罪^{つみ}のうちにあったのです。

わたしを^{あら}洗^{ゆき}ってください。雪^{しろ}よりも白^{かみ}くなるように。神よ、わたし^{うち}の内に清^{こころ}い心^{そうぞう}を創造^{じゆう}し、新^{あた}しく確^{たし}かな霊^{れい}をさ^{すく}ずけてください。救^{すく}いの喜^{よろこ}びを再^{ふた}びわたしに味^{あじ}わわせ、自由^{じゆう}の霊^{れい}によって支^さえてください。主^{しゅ}よ、わたし^{くちびる}の唇^{ひら}を開^{くち}いてください。この口^{くち}は、あなた^{さんび}の賛^{うた}美^{しゅ}を歌^みいます。主^なイエス・キリストの御^み名^なによって。アーメン。

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何^{なに}者^{もの}をも神^{かみ}としてはならない。
2. あなたは自分^{おの}のために刻^つんだ像^{ざう}を造^{つく}ってはならない。それにひれ伏^ふしてはならない。それに仕^{つか}えてはならない。
3. あなたは、あなた^{かみ}の神^{かみ}、主^{しゅ}の名^なを、みだりに唱^{とな}えてはならない。主^なは、み名^なをみだりに唱^{とな}える者^{もの}を、罰^{ばつ}しないではおかない。
4. 安息^{あんそく}日^{にち}をおぼえて、これを聖^{せい}とせよ。
5. あなた^{ちち}の父^{はは}と母^{うやま}を敬^{やま}え。
6. あなたは殺^{ころ}してはならない。
7. あなたは姦^{かん}淫^{いん}してはならない。
8. あなたは盗^{ぬす}んではならない。
9. あなたは隣^{りん}人^{じん}について偽^ぎ証^{しょう}してはならない。
10. あなたは隣^{りん}人^{じん}の家^{いえ}をむさぼってはならない。隣^{りん}人^{じん}の妻^{つま}、またすべて隣^{りん}人^{じん}のものをむさぼってはならない。

(出エジプト 20、申命記 5)

* 賛美歌 16:2 あしたの星なる

あしたの星なる主よ とく来たりて お暗きこの世に 御光をたまえ
主よ 主よ 御民を救わせたまえや アーメン

共同の祈禱 祈禱書8 降誕節第一主日 待降

やくそく ちゆうじつ かみ み こ らいりん よげんしゃ
約束に忠実な神さま、あなたの御子イエス・キリストの来臨によって、預言者たち
やくそく じょうじゆ すく ひ
に約束してくださったことが成就しました。わたしたちに救いの日がおとずれたこと
おぼ かんしゃ みな しゅ ふたた こ えいこう ちから
を覚えて、感謝しつつ御名をあがめます。主が再び来られるとき、栄光と力をもって
みくに しょうり せんげん すく かんせい
御国の勝利を宣言し、わたしたちの救いを完成してくださいますから、わたしたちは、
きぼう も しゅ さいりん ま のぞ
希望を持って主の再臨を待ち望みます。(マタイ1、マタイ24)

献 金 (黒)教会活動 (赤)甲信地区伝道 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖書朗読 ルカによる福音書2章41-52節(新約聖書104頁)

説教・祈禱 「神殿の少年イエス」 熊田雄二牧師

* 賛美歌 16:3 ダビデのすえなる

ダビデのすえなる主よ とく来たりて 平和の花咲く国を建てたまえ
主よ 主よ 御民を救わせたまえや アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

てん われ ちち
天にまします我らの父よ
ねが み な
願わくは御名をあがめさせたまえ
みくに き みこころ てん ち
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
われ にちよう かつ きよう あた
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
われ つみ おか もの われ ゆる つみ ゆる
我らに罪を犯す者を我らが許すごとく 我らの罪をも許したまえ
われ こころ あ あく すく だ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
くに ちから さか かぎ なんじ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 16:4 力の君なる

力の君なる主よ とく来たりて 輝くみくらにとわにつきたまえ
主よ 主よ 御民を救わせたまえや アーメン

* 祝 禱
後 奏 (黙禱)
報 告

○ 本日 ● 礼拝後、ZOOM参加者による懇談会を30分くらい行ないます。

○ 次週 【朝拝：降誕節第二主日】

ルカ福音書3：1～20 「悔い改めの洗礼」 熊田牧師

ソングシート 17:1、17:2、17:3、64 大日南苗香

ZOOMでの礼拝参加をご希望の方は、礼拝開始5分前までに、以下のURLよりご参加ください。 <https://us02web.zoom.us/j/9902612035>

プライベートID 990 261 2035 (パスワードなし)

※ 礼拝・視聴に参加される場合、氏名もしくはイニシャルを入力してください。

● 小会・執事会 午後1時 コイノニアホール／3階小礼拝堂

❖ クリスマス献金を献げましょう。今年度予算120万円。それぞれの経済状況に合わせてお献げください(執事会)。

➤ 2021年 教会テーマの募集:11月15日から12月20日12時15分

201129 ルカ2：41～52 神殿の少年イエス 16：1-4

I 少年時代のことが分かるただ一つのエピソード

ルカは、「多くの人が物語にしようと手を着けている」と最初に書いています。その中には、本物があって、神殿での少年イエスのことを書いているものがあるかもしれません。そういう文書があったとしても、これは母マリアから聞く以外にない話です。ルカは文書記録を資料にしているか、マリアから取材しているか、どちらかですが、どちらにせよ、情報源はマリアです。

イエス様の兄弟も一緒にエルサレムに行ったでしょうから、弟たちが情報源である可能性もあります。たとえば『ヤコブの手紙』のヤコブは、十二使徒のヤコブではなくて、イエス様の弟のヤコブです。ヤコブも、もちろん、このエピソードは記憶していることでしょう。しかし、自分の記憶は、帰りに兄さんのイエスが見当たらないというところまでです。そのあと両親がエルサレムに引き返してどうだったかは、ヨセフかマリアに聞く以外にないでしょう。子供たちは親類や知人に守られてナザレに帰ったことでしょう。

エルサレムからナザレまでは約100キロで、歩いて三日くらいの距離です。イエスがいないと両親が気付いた時は「一日分の道のり行ってしまい」とあるので、エルサレムに引き返すのにも一日分かかり、それからまた三日分の道を帰ることになります。サマリアを通るので、山賊対策として「道ずれ」というグループ、キャラバンを組んで行ったり来たりするわけです。ヨセフとマリアは、キャラバンから離れた少年イエスを一人で帰らせるわけにはいきません。この時イエス様は12才です。かつて、14.5才のマリアがユダヤに住んでいるエリサベツに会いに行った時も一人とは思えません。ヨセフが一緒だったか、誰かが一緒だったのでしょうか。

II 人となられた神の御子

ルカは、「多くの人が物語にしようと手を着けている」と最初に書いているのですが、その中には、多くの偽物が出回っていたことが分かっています。その中には、イエスの少年時代のエピソードを書いたものがいくつかあります。たとえば、イエスは神なので神わざをするというのがありますが、これでは悪魔のわなにかかってしまいます。悪魔がイエスを誘惑

した方法は、神の子としてのイエスの神性を引き出そうとしたことだったからです。「神の子なら石をパンに変えてみろ」、「神の子なら神殿のてっぺんから飛び降りてみろ。天使が支えるだろう」。これは、神の御子が人間になったことを無意味にしようとするタクラミです。人間になったのは人間を救うためだと、悪魔には分かっていたからです。ルカは悪魔のわなにかからないように、「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」と、人間イエスの成長をもってこのエピソードを結んでいます。

この12才の時のエピソードで興味深いのは、やはり、イエスの人間性です。マリアの叱り方にそれが表れています。マリアは、普通の子供のようにイエス様を叱っています。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんも私も心配して捜していたのです。」実際は、こんな文章みたいな言い方ではないでしょう。「どうしてくれるのよお、見なさい、お父さんも私も心配して捜してただから。」生まれた時から12年も子育てしていたら、自然にこういう言い方になるでしょう。

さらに興味深いのは、イエス様の返事に対する両親の反応です。「しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。」本当に分からなかったのかなあと感じてしまいます。イエス様は「ボクは自分の父の家にいる」と言われました。つまり、天の神が父だと言われました。それは、イエス様誕生の次第で分かっているはずのことです。マリアは天使の受胎告知で言われていました。「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる」と。ですから「いと高き神の子」と告げられていたのです。

ヨセフも同じ内容のことが告げられていました。それなのに、「両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった」と、ルカは記しています。「すべてのことを心に納めて思い巡らす」マリアが、この時だけ、度忘れしたんでしょうか？ いいえ、これがむしろ、本当に神の御子が人間になられたことを意味していると言えます。私たちは、1章の受胎告知から2章の神殿の少年イエスまで5分もかからず読んでいます。ヨセフとマリアは、12年かかっているんです。12年、他の子供たちと一緒に育てているんです。ですから12年の日常会話のままなんです。だから、本当にイエス様は人間になられたんだなあと思わせるエピソードなんです。

Ⅲ イエスのメシア意識

イエス様の12才の時のエピソードは、ここだけにあります。偽福音書には変なのがいっぱいあります。幼少期から少年時代のことが面白おかしく恐ろしく、たくさんあります。ルカは、少年イエスの天才ぶりを書こうとしたのでしょうか。それだと、偽福音書と変わりません。すごい少年だというだけの話です。ルカ福音書によって、私たちが知ることのできる大切な事は、イエス様はいつ「自分は神の子メシアである」と意識されるようになったかということです。それを自覚して主張なさったのが、きょうの聖書箇所です。

ヨセフとマリアがイエス様を見つけたのは、46節です。「三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。」三日間も見つからなかったのですから、気が気ではなかったでしょう。生存率ギリギリの72時間です。「どうしてこんなことしてくれたのよお」と言いたくもなるでしょう。

「聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた」というのと、「両親はイエスを見て驚いた」というのでは、意味が違うでしょう。聞いている人たちは少年イエスの知恵に驚いたのですが、両親は「こんな所にいたのか」と驚いたのです。まさか子供一人が神殿にいるはずはないので、三日間エルサレムの町中を捜したのでしょうか。そして、神殿に賢い子供がいると耳にしたのか、行ってみると、イエス様でした。

この場面、一つは、「イエスは知恵が増し」とルカが書いているように、少年イエスの成長ぶりです。神の御子としての知恵なら「知恵が増し」というのは余計なことです。神の御子としてなら、イエスは知恵そのものです。「初めに言葉があった。言葉は神であった」のです。

から、イエスは言葉なる神であり、その賢い受け答えは神の言葉そのものです。神の言葉を語る預言者職は、30才になってからメシアの仕事を始めたとき発揮されますが、この場面は、神の子だから学者たちとの受け答えで賢かったのではありません。少年イエスの成長過程で、知恵が増していることのエピソードです。

しかし、この場面のもう一つ重要な事は、神の御子としてのキリストです。イエス様は、まるで神殿のぬしであるかのように、「学者たちの真ん中に座り」こんでおられます。そして母マリアには、はっきり宣告なさいました。「**どうして私を捜したのですか。私が自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか。**」

ここは、もう何も説明が要らないほど、はっきりしています。自分が神の子だと言っておられます。自分の父はヨセフではなく父なる神だと言っておられます。ただ、ヨセフとマリアは、今まで言ったことのないことをいきなり言われたので、その時は意味が分かりませんでした。12才の時、初めて言われたのです。でも、母マリアは「これらのことをすべて心に納めていた」ので、そう言えばこの子はやはり神の子だったと思い返したことでしょう。

ルカは、なぜ、このエピソードを書き記したのか。それは、イエスのメシア意識です。いつごろ御自分が神の子キリストであると自覚するようになったのか。それは12才の時であると。イエス様は赤ちゃんとして生まれ、成長されました。だから、言葉を覚えてしゃべるようになる幼児期も過ごされました。聖書(旧約)を勉強する少年時代も過ごされました。そして、12才の時、エルサレム神殿で、両親に「**私が自分の父の家にいるのは当たり前だ**」と言われました。

ユダヤでは大人の年齢とされるのは、12才くらいだったようです。今でも、12才くらいで少年から大人になる儀式を行なう部族が世界中あちこちにあります。日本でも、中学生から料金が変わるものがいろいろとあります。世の中でだいたい大人扱いされる一つの節目が12才くらいであることは、古今東西同じようです。

IV 神と人にと愛されるイエス

きょうの聖書箇所メッセージは最後の所にあります。神殿でのエピソードのあと、両親に仕えてお暮しになりました。その青少年時代、知恵が増し、背丈も伸び、神と人にと愛されました。メシアの仕事を開始なさるのはその18年後です。それまでは、律法に従って人間の務めを果たされました。父母を敬って両親に仕えてお暮しになりました。人間として心と体も成長し、神と人にと愛されました。

メッセージの一つは、イエスはメシアとして律法の要求を満たすお方だということです。これを律法への積極的服従という言い方をします。それは、律法が「～しなさい」ということを積極的に行なうからです。それによってキリストは神の満足を獲得して、キリストを信じる者に神の満足を分け与えてくださいます。つまり、イエスの生涯が私の生涯であるかのように見なされるのです。

律法への積極的服従という言い方があるからには、律法への消極的服従という言い方もあるわけですが、それは、律法が「～してはならない」ということを犯してしまう違反への罰を受けることです。つまり、イエス様の場合、十字架に架かることです。十字架に架かることを消極的とは言いたくない気もするのですが、神の律法は二つのことを要求して、その二つが満たされなければ、神の満足はありません。神の満足がなければ救いはないのです。イエス様は救い主として、神の満足を獲得してくださいました。二つの満足を獲得して私たちのものとしてくださいました。

ですから、私たちもイエス様に倣って、神を愛し隣人を愛せよという律法の要求を積極的に満たしたいものです。また私たちは、キリストのかたちに成長していくのですから、その祝福として神と人にと愛されたいものです。